

ヤマヨ測定機株式会社

老舗の「測る」技術を次世代へ――。

現場の声を凝縮したデジタルメジャーが、アパレル業界の生産性を劇的に変える。

ヤマヨ測定機株式会社は、自社工場において多種多様な巻尺（ものさし）を製造・販売する一般長尺計の専門メーカーです。同社が製造する巻尺は、伸び縮みが少なく極めて高い精度を誇るハガネ製から、安価で扱いやすく塩ビコーティングを施したガラス繊維製まで幅広く、日本のあらゆる計測現場を支えてきました。その用途は学校教育やスポーツのグラウンド作り、工場、土木・建設現場、さらには官公庁の検査証明用まで多岐にわたります。専門性の高い分野では、水位を測定するセンサー付き巻尺や、土木現場の記録写真用に用いられる幅の広いリボンテープなども手掛けています。

お客様のどんなニーズにも応える高い「技術力」と「独自性」を誇る同社が、本事業をどのように活用したのか、代表取締役社長 鴨下 裕彦 様にお話を伺いました。

企業名：ヤマヨ測定機株式会社

所在地：東京都足立区足立 2-23-13

代表者：鴨下 裕彦

企業HP：<https://www.yamayo.co.jp/>



従来製品「GR スチロン」

Q. どのようなきっかけで本事業に参加しましたか。

今回、大きな変革を志した背景には、長年当社の主力市場であった建設・土木業界における構造的な変化への強い危機感がありました。土木・建設現場では現在、人手不足の深刻化や工期短縮の要請が至上命題となっており、それに伴い計測作業の省力化が急速に進んでいます。かつては2人1組で端と端を持って行っていた計測作業が、最新のデジタル技術やレーザー計測器の普及により、現在では1人で迅速に完結できるようになりました。この「1人計測」へのシフトは、物理的な「ものさし」である巻尺を必要とする場面を確実に減少させていました。



検査基準として使われる高精度品「標準巻尺」

さらに、現場における巻尺の立ち位置自体も変化していました。かつて巻尺は、一つの現場が終わるごとに廃棄される「消耗品」としての側面が強く、新しい現場が始まるたびに新調されていました。しかし、昨今のコスト意識の高まりや現場管理の徹底により、巻尺は大切に使い回される「備品」へと格上げされました。この変化は、同社にとって製品の買い替えサイクルが長期化することを意味し、市場全体の需要が目に見えて先細りしていく状況を生み出していました。

こうした主力市場の飽和と変化を肌で感じ、「既存の販路だけに頼り、良いものを作っていれば売れるという時代は終わった」と確信しました。営業担当者が自信を持って新しい市場に踏み込める革新的な「武器」が必要であると考え、100年以上の歴史を持つ自社の技術力を維持しつつも、それを全く異なる分野へ適応させる道を探るため、本事業への参加を決意しました。

Q. 貴社の取り組みに対してどのような支援がありましたか。

本事業への参加を通じ、アドバイザーの伴走支援のもと、自社のこれまでの常識を覆す「マーケットイン」の視点による製品開発に踏み出しました。それまでの当社は「良い製品を作れば売れる」というプロダクトアウトの発想が中心でしたが、今回はまず「誰がどのような課題を抱えているか」を徹底的に探ることから始めました。

ターゲットとして選定したのは、アパレル EC サイトの普及に伴い需要が急増している「ささげ（撮影・採寸・原稿執筆）」業務を担う現場でした。アドバイザーの紹介により実際に現場を訪問しヒアリングを行ったところ、そこには非効率な作業実態がありました。

現場のスタッフは1日に数百着もの衣類を計測しますが、その作業フローは「メジャーで測る」「その数値を紙にメモする」「後でパソコンに数値を打ち込む」というアナログな手順の繰り返しでした。

この課題を解決するために開発されたのが、Bluetooth 機能を搭載したアパレル専用のデジタルメジャーです。このデバイスは、計測値を確定させた瞬間にボタン一つでパソコンやスマートフォンの管理ソフトへ直接データを転送することができます。これにより、従来のメモ書きと再入力の工程が完全に不要となり、作業の大幅な効率化と精度の向上を同時に実現しました。

開発の過程では、アパレル現場ならではの特殊なニーズに合わせるための細かな調整が繰り返されました。例えば、男性と比べ手の小さい女性スタッフが多い現場でも長時間疲れずに使用できるよう、デバイス自体の極限までのコンパクト化を追求しました。また、衣類の曲線を正確に測りやすくするため、テープの幅をあえて従来品よりも細く設定しました。技術的な障壁もありましたが、一つひとつの課題をアドバイザーと共に粘り強く解決していきました。



アパレル業界向け新商品「ミリオンデジタルピン」

Q. 本事業に参加して得た成果はありますか。

本事業に参加したことで得られた成果は、革新的な新製品の開発だけに留まらず、組織文化や事業承継の面においても極めて大きなインパクトをもたらしました。まず製品面では、アパレル採寸現場の課題を克服した、完成度の高いデジタルメジャーが誕生しました。この製品は、今後のリリースに向けて、すでに BtoB の直接的な販路開拓も進むなど、老舗企業が自らの殻を破って新市場へ進出するための確かな「足掛かり」となりました。

また、このプロジェクトは組織の内部にもポジティブな変化を引き起こしました。保守的になりがちだった製造部門や営業部門が、「自分たちの技術が全く異なる業界で切望されている」という事実に触れたことで、自社の技術力に対する誇りを再認識し、「新しい価値を創出する」という活気が生まれました。

さらに、自社の変革に向けた取り組みを外部に発信することで、事業承継の観点においても、外部から企業価値を改めて認識するきっかけとなりました。本サービスが次代へバトンを繋ぐための重要な基盤の一部となることを確信しています。

加えて、本事業の「企業変革スクール」を通じて、同じ志を持つ異業種の経営者たちと机を並べ、事業承継や組織変革の苦労を共有できたことも大きな財産となりました。他社の成功や失敗を「疑似体験」することで、多角的な視点から自社の未来を設計するための経営判断力が養われ、孤独になりがちな経営者にとって、信頼できるコミュニティを得られたことは大きな支えとなりました。



2025 グッドデザイン賞受賞「リボンロードケース」

Q. 今後の展開について教えてください。

今後の展開として、今回開発したデジタルメジャーを起点に、アパレル業界全体の計測 DX を牽引する存在になることを目指しています。2026 年には大規模な展示会への出展を予定しており、そこでのローンチを皮切りにプロモーション活動を本格化させます。これまでの卸売業者を通じたルートに加え、業界紙や WEB メディア、さらには SNS を活用してユーザーと直接繋がる BtoB のダイレクトマーケティングを強化していきます。

また、今回の成功体験で得た「マーケットイン」の手法を、アパレル以外の未開拓市場にも積極的に展開していく構想を持っています。「正確に測り、そのデータを即座に記録・共有する」というニーズは、物流、製造、あるいは文化財の調査など、あらゆる産業現場に共通する課題です。今後は今回のデジタルメジャーの基盤技術を応用し、異なる業界特有のニーズに合わせたカスタマイズ製品を展開していく方針です。

同時に、事業承継をより確実なものにするため、組織体制の近代化も進めていきます。今回のプロジェクトで活躍した社員を中核に据え、新しい市場を自ら切り拓く「変革のDNA」を社内に定着させ、事業承継に向けた盤石な経営基盤を構築していきます。また、さらなる公的支援も戦略的に活用しながら、自ら顧客との接点を作り出し、現場の課題を解決し続ける「課題解決型メーカー」への転換を加速させます。

アドバイザーからのコメント

ヤマヨ測定機株式会社様は、長年にわたり公共土木や学校現場で活用される巻尺を製造する、信頼と実績を備えた老舗メーカーです。高精度なハガネ製や扱いやすいガラス繊維製など、幅広い製品を通じて「測る」技術を支えてこられました。

一方で、業界全体の縮小や販売構造の変化に直面し、新たな製品開発においても自社技術中心のプロダクトアウト的な発想が色濃く残っている印象がありました。

今回の取り組みでは、「誰の、どのような困りごとを解決するのか」を明確にするところから開発を進め、ターゲット市場の選定や現場ヒアリング、試作と検証を丁寧に重ねることで、マーケットイン型の商品開発が徐々に社内へ浸透してきたと感じています。

特に、アパレル業界の「検品業務」に着目したデジタルメジャーの開発では、作業現場の具体的な課題を起点に開発が行われたことで、技術部門・営業部門が一体となって取り組まれた点が印象的でした。製品仕様だけでなく、社内の意識変革にもつながった点は大きな成果と考えます。

本製品は、異業種への展開可能性も高く、今後の応用や派生開発を通じて、同社が「計測のソリューション企業」として進化していくことを期待しています。展示会への出展やPR戦略も視野に入れつつ、引き続き伴走支援を行ってまいります。